和田定節編
開明小說轉

春雨文庫

第五號 下

A416
10

春雨文庫第五編巻之下

東京　和田定節編集

○第十九回

久方の光り長閑けき春の日ふ右づ心なく花の散らん實ふ打ちぐく天氣ふて弥生半端の麗らさふ下こ戸も上戸も心浮き立ち攘夷鎖港の論ふ因り物騒がしき世ふいあれども武具と扱ふ商人や銃器ふ掛

48-7528

ヲし職工らハ降て湧たる儲多きハ亞米利加さまと
徐と言ふと川柳点ハ穿ちとる其悪口も道理ハく
繁昌同志誘ひあひ割籠瓢箪携えッ祇園清水
東山嵯峨や小室の春闌て花見ハ間の無き佳節ゑ
もとも勤王の士ハ苦慮多けれど幕吏も隨て心
と悩ますと茂く静心ゑき日々の景況ハ新撰組の
隊長近藤勇と副長土方歳三ハ遊歩と名とーく
不案内ゑる京師近傍の地の理と極め置んと思ひ帰久
る厂金ゑら祢ども賑ふ花と餘所ふゑー竊ゑハ旅宿
と立いで喜撰法師ガ都のさつことと詠さりー宇治の
里と一見做さんと往きさるふ京師より里程も少ー
隔さる故閑静言ん方ゑー近藤勇ハ宇治橋の上
より霞棚びく山々と打眺め瀑渓たる長流の水源
水下と遥ふ望と土方歳三ハ對ウて言ふ此川ハ近
江の國琵湖より出れども川の中所々磐石多くーて
船を通ずると克ハずと聞り治兼四年五月源三

位頼政兵と平等院ゐ屯し當橋の中程を切落し
て平家の兵と防ぐ時ゐ平軍の中より力い百人ゐ當
り声い十里ゐ聞え歯の長さ一寸ありと言ふ田原
藤太九代の末孫田原又太郎忠綱河の流れゐ馬を
乗り入れ先鋒せしと以て頼政の軍終ゐ敗れ平軍
此方より彼方へ渡りしゐり又元暦元年正月二十
日佐々木高綱梶原景季ら馬を乗り入れて木曽
義仲の軍と破りしい彼方より此方へ渡りしゐり渡り
たる者い勝渡られしい衆破らる然れども淵瀬の模
様を知り渡らるべき所より渡りて勝るゐり地理ゐ暗
くして戦争を為すい盲人の杖を振て人ゐ打ちかゝる
が如く其目當無らんと思ふ故今日の好天氣ゐ乗じ
ゐ誘引申したりしゐ今果して此事を思ひ出さり御
同前ゐ関東生れゐれば京師近傍の地の理ゐいと
ゐつゞ暗きゐ因り庁時も油断の成らざる折ゐ遊
歩ゐ事よせ諸方を一覧ゐして豫め腹へ入れ置ざ

れば急場に臨み後を取ると必定なられん君に如
何思ひなるにやと演ぜれば土方歳三うち点頭
長州の模様および諸浪士の挙動今も事あらん
と為るの体なれども薩州の藩士に半して激徒の
を迫り未だ一致せざるに非ずと思はる兎も角
ふも戦端を開くを遠からざるに鏡にかけて見るよ
り明瞭なるべし仰の如く地の理を知らざれば争で
戦ひを接るを得ん實に田原又太郎佐々木高綱ら
が功を立しも竊に川の瀬を探り豫め浅き所を知
り居る故なり此度の事件の内より發せんと外よ
り起らんと西より出んと東より来らんと其現はる
場の定めがたけれど只日くに奔走して四邊を巡視
し要所を定め置んに如ざるなり。何彼処に見も
る石の塔の高さ五丈にて十三層ありと言へ浮塔と唱
ふるものの僕聞く往昔僧叡尊が此川にて漁猟をする者
に諭し殺生を停めその代りに布を晒すことを教え家

業と為さ
せたりと今
木津川ふて布
と晒す人い其
漁師の子孫なるよし
此時叡尊一基の塔を川の
中ふ建てるい則とれふて如何なる
洪水あるも隠るゝ無を以て浮塔と呼ぶ

よし今を往昔ふせゞ數田戦争のゆゑ地名大砲
の為ふ撃倒され跡形い無ならんを矢軍ふてい然
まで至らざるふ因り土地と荒すとも少なりし
など話しゝ往昔を思ひ今を計りて尚其地此地を道
遥一頓て宇治の町ふ至りたるふ茶を製す家陶器
を焼く店など擔を双べまと牧の島の土手下ふ至る
ふ急須茶碗茶瓶などと飾り附し最風流なる家あ
りけれを近藤土方の両人いその見世先ふ腰とか

け一品二品のものと買ひ此道の往く先へ何処へ出るや彼処の横町と曲れたゞ何と言ふ村なりやと問ひなどして暫時憩ひ居るうち奥より年のころ二十前後と思ふる女の容顔美しきのをゝらず物言取まはし節ふ協ひ色ある花の匂ひ飜るゝが如き風情ふ見もれど髪を剃り白き衣服を着し法衣ハ纏ハざれども尼の姿なる女出來り二人ふ挨拶して言ふ「今日ハ風もなく麗らゝなる天氣で出遊

歩ふハお楽そゞ一入で入ッたやいませう勇「関東もの〻ハ何處へ往て見るのも聞ゞ當で道を知らるいふハ困り切るのサ尼「夫でハ彼徳川さゝゐのお方で入ッたやいますう歳「まゝ〻其尻ッ尾の方ふ振ら下ッて居る味噌糟の様ゐ者サ尼「オホ〻〻古戯言だッかり併吾儕ハ京都生れで居りるゞ〻徳川さゝゐのお方とお聞申すとお懐ろ〻ぢんドます。マア此処ハ餘りの端近一二本の櫻ゐれども昨日今日ゞ盛りの最中夫ふ

有るのゞ庭の木戸は覧遊をして下さいまーと吱
て二人い顔見合せ容子あり氣る尼ゞ口振り何い
兎もあれ一見せんと思ふ心い同ドふて両人「然らを
遠慮なく園の花と見せてお貰ひまうさうト言
ひゝ立て傍へる庭口と入り飛石傳ひふ樹木の
あひだを潜りて這入れを尼い奥るる坐敷ふ在り
て二人を迎へ「山茶なれども所の名産お咽あ
ーふ一服と盆ふ乗とる急須と茶碗菓子さへ添て

差ー出せを二人い椽ふ腰うち掛け「イヤまうお構ひ下
さるなト會釋なーゝ住居ゝ庭の模様を右見左見
るふ立派ならねど閑雅ふく其造り方何とるく風
韻高く思いるもゞ主の尼い何れよー有る者ならん
と心の中ふ想像されさり尼い二人ふ茶を進め菓子
るど挾をて愛相なーゝ江湖上の話ーを二人ふ問
ひ浪士らの暴行まゝ甚だーと聞き或ひい溜息
をはき或ひい愁然ーとして涙を含を眼を潤いすれ

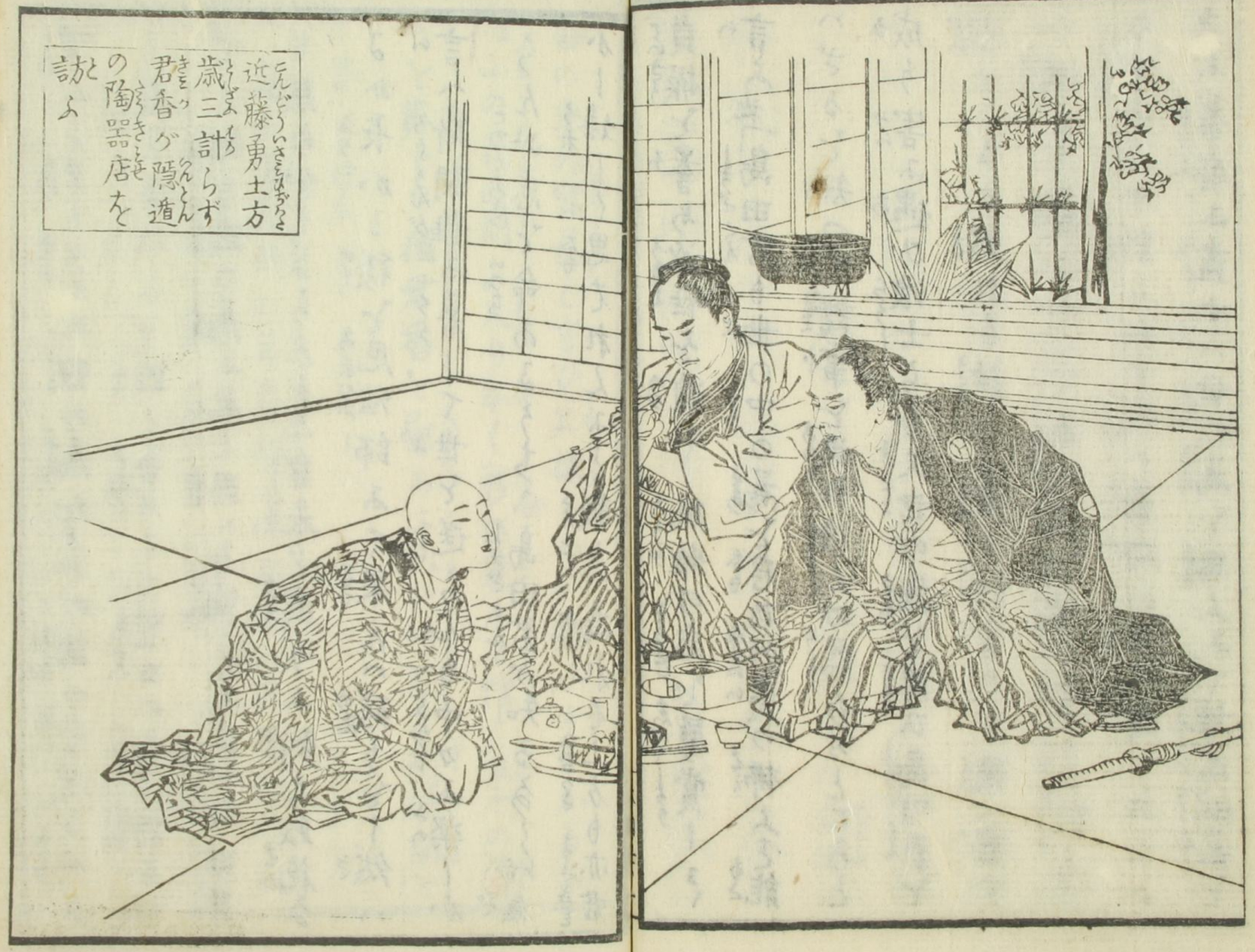
を近藤問ふて言ふ「おん身は未だ蕾ふ齊しき花
なるふ斯る姿とは成られしぞ先刻よりの話しの
模様ふては関東へ由縁あるお人と思はるゝ故用無
き事ながらお尋ね申するりと聞き彼の尼は村菱
れ暫時辞も無りしが吐息はいて言ふ「皆様のお装
と拝見致しお詞をうかがひ江戸のお方と察せられ
心床しく存じましとゆふお茶なと一ツ上がれと見
苦しい所へお通し申しさのでお座います吾儕は関

東のお味方して浪士の為ふ非業の死を遂まし島
田左兵衛の妾君香と申せし者左兵衛の計ひまし
事ゞ世の中の為ふなるゝ成らぬは存じませねど
吾儕の身ふ取りましては恩深い左兵衛ゞ目の前ふ
ての敢果るゝ際期若し男なるゝ協なねまでも其場
で切り死致しませ祢ば成らぬ筈を差し込む癪ふ
倒れさまし夢中ふて夜を明しやうゝ人ふ助けられ
生氣ふ成ても天窓は上らず枕ふ着て當座を過し

左兵衛の身の話しと少が聞るど弥増す哀しさ仮令そ
の日い後れても空しく見殺しふしと申し訳ふ死ん
で仕舞ふと思ひましと人ふ留られ未練ふも存
生居れどせめて佐兵衛の後の世と安からせんと
思ふより煩悩るらね菩提心い請る恩と忘れね
為め髪と下せる身とるるより只世の中の楽しと
い何様しと事ど風雅やら知らね作らも春の朝の
梅櫻秋のタアい千種の花鳥の鳴く声虫の音のと

浮世の事い目ふ入れず耳ふ少とと存じましと故京
都と距れて此宇治へい移りましとど只居る訳ふい
参りませぬから親族の者の世話と請け御覧の通
りの陶器渡世まう世の中の事い一切聞まいと存
じて居るのでさいますど江戸のお方と思ひしよ
り佐兵衛の無魂と慰める便ふも成うと存じお
足と止めましと訳誠ふお恥かしい身の果でございい
ますト涙ぐるの物語りふ近藤も土方も豫て少く

浪士の為ふ死と遂し島田佐兵衛の妾の君香ハ元祇園町の藝子なりしとなると仮令一時の思ひ込とふもせよ只一ト筋の鬢の毛とども惜がる年ごろふ斯髪を下し尼の姿と成りさるハ泥水より出し蓮葉の濁りふ染ぬ者と言ふべし曾我祐成が菩提と吊らはんとて尼と成りさる大磯の遊君虎が貞操ふ髪髪りと心の裡ふ感賞しその志の厚きを褒め君香尼の為ふ島田氏の横難を痛をまと君香尼の貞操を誉め浮世を遁れし風雅の志を屢賞しつゝ言ふ迄「島田君も世の中の為を思ひ外夷の拂ふを能いざると知つて諸事を扱ひ浪士の怨むところと成り害ふ遇ひ浪士らも又世の為を思ひ島田君を害せしより然れを討る者も討をのも國へ盡すの誠より發るふして島田君を討し者も又討るの時あるや討られす我々幕府の臣の端くれなる為ふ幕府ふ盡すハ世の為と思ふふて攘夷倒幕を



こんどういさをのぶ
近藤勇土方
歳三計らず
君香ゞ隠遁
の陶器店を
訪ふ

唱ふる者も又これ國の為たゞその論の合ざる所より毀る爭ひより因て吾々として翌日の命い計られずと雖も國の為ゐ死と思へば悔るとゝし島田君も然の如くゐらんかん身未ゞ盛りゐ到らぬ花ゐるゐ長かる後と尼法師ゐて果んい殘りとし然い言へ斯閑雅ゐ暮して世を送らんも中々ゐ楽しかうん此志と命あるうちゐ島田君が知るゐ〳〵嘸かし嬉しく思れんゐと歎息為れた土方も亦君香の身の容色と言ひ貞操といひ類ひ少るかるゐ深山の花の問よ人も〳〵移ひ果んと惜を且その薄命と歎ゞ〳〵猶君香と慰め二人い此處ゐ稍時間とぞ費しける

島田佐兵衛の妾君香い佐兵衛の死後髪と落して尼法師の姿とゝり名と貞信と呼び豫て佐兵衛より與えらるゝ金と蓄へあり且家財とうい十分ゝり〳〵故彼是の資本と以て宇治牧の島

へ陶器を焼く店を開き此處に住居て浮世の熱の塵を除け只月花を友とし島田佐兵衛が後世を吊ひ行ひ濟して世を経るに類ひ稀なる貞婦と言ふべし前に島田の事を書しに力石とその女房に増の因をみ依りて成るが此程貞信尼の物語をせし者あり故に後れ走るが茲に出せり或ひは貞信尼を祇園町の藝妓來葉なりとも言ふ総て此書の趣意と為るところの表街道の裏路にて婦人の行ひの人と異なると掲るまた男子の事跡に往々立消のあり看官これを咎め給ふる然れども近藤勇士方歳三とうの後に至りて聊か話しあり追々説出んのみ

○第二十回

表を通る人の都ゝ一〔め〕の言ふ寫真が出来たら見せて動けば宜ふとふぶろ〔ア〕まア吉太郎さん一すを吹きなさい彼様な事を言て唄つて往きますから〔ホン二ホ〕梅

さんの心意氣ゞ彼さッきら嬉しいぢらうゞ寫真屋へ往ても何でも並んで居るのと否がるのゞ物ヲ夫ぢうゝ一人寫しの方ハ隨分能くたろきり罵ッさゞ一所ゝ取さのゝ自己の體と離れやうと為るので動いさりんぢうゝ是ゝ見ゝト且辺吉太郎ハゝ梅と二人で並び取うし寫真と別々ゝ取りさる寫直と出し二人並んゞ方とゝ梅の前ゝ置き「夫ゝ此方へ論より證據でゝ梅さんハウムとゝ何とゝ遣つと見えて強い顔をして居ると梅「アレ貴君こそ鬱陶しい女ぢと言ふ様ゝ顔でと言ひるゞ寫真画と取り寫しと顔と吉太郎の顔とそつちと見此方と見くらべ居らしゞ梅「生ア古覽ゝさんゝ前さんハ男ぢから無ッても宜い愛敬までゞ寫ッて居てそつくり其侭の顔で古坐いますワ真正ゝ不思儀ぢやア有ません う祐エ吉「他の者の顔ゞ寫ッて居りやア不思測ぢゞ寫しと顔ゞ有のぢから當然ぢやア無う梅「然ゞ先

き刻寫真屋へ往と時ふい貴君と双んで居て寫すのぐ
から誠ふ間ゞ悪くッて寫真屋ゞ厚面皮女ぐと思
ひい仕舞うと何様ふ否ぢ座いまゝさらうき「夫ぐ
から何の彼の言ても自已の方ゞ餘計宜と思ッて
居るのふ違ひるいお前い誠ふ否ぢッとらうゞ此方
い誠ふ嬉しくつてへン寫真やさん悼りるゞ彼様
ふ女と並んで寫真を取ンでげす弁して拙の女房へ
女ゞ美くッて愛敬のある斗りぢやア無く程の宜

いのと心いきと夫うう後い手管ゞ上手で男と愚弱り
と為せるのと水性充満ぐから夫まで寫して お呉る
せへト言て自慢をかつてこのサ梅「夫りやア吾儕ぐッ
て腹の中を明たゝ一ふーて宜るらゞ僉ふ向ひ悼りる
ゞゝ此様る男ゞ持るゝ持て居覧と言ひますワオ
ホゝ吉「持て御覧い宜ゞ其後編へ往と甘口で無性
で意地ゞ汚るい何の言ふ跋ゞ附て居るのぐらう梅「
モウ〳〵串戯どころでい無い何様でも上方へお出ふ成

のでその日限も間ぢらしのお話しも又外聞の悪い
も忘れ今日は御一所ゐ連て往て戴いて貴君の寫真
むりで無く吾倘の寫真まうと彼様〳〵二人並んで
居る姿まで取さへ嬉しう古坐いますゲ一日お目ゐ
掛らぬくッても案ぢられて氣の揉ると京都と江戸
とゐ離れて一年も二年もお顔ゲ見られぬい様ぢッ
さら御膳も咽喉へ通らぬくるり死で仕舞ぢらうと
思れます若し左様なると此寫真繪のお姿ゲ今の

世計りう後の世までの形見ゐ
成りは為まいうと何ぢう哀しく
つて成りません松浦佐用姫
とやらは良人の狭手
彦とうみ別れる
哀しさの
餘り石ゐ成て
仕舞さとやう吾倘も

貴君と慕ひ万一石ふでも成さら貴君へまア嘸可笑
くお思ひなさいませう祐へ左様成さら此寫真も一
所ふ石ふーく仕舞ますワと言ひツ ホロリと泪と飜
せば吉太郎い天窓と搔なぐ「お前と京都へ引き
取るゝ自己が此方へ帰つて来るまでい石ふるつて
居て呉ると水性が出来祐へかゝ有難いけをども
間違つて蒟蒻ふでも成られ〳〵大騒動ぢア梅「
アレ串戯ぢやア有ませんようト吉太郎の顔をぢつ
と見詰て溜息つき「夫ぢやア彼この寫真とぢが貴君
のお爪の先を少ー下さいゝ吉「何ふ為るのぢ梅「此寫真
ふ添て肌身を放さず持て居ますかゝサ吉「左様言よ
沢ゝ生爪の三枚や四枚引をぐー上納すると為て
も宜が其代りお前かゝも貰ハなけをやア成られへが
美知ゝ子梅「真正ふ吾俤の寫真も持て往て下さい
ますゝ其処らで棄てお仕舞なさいませうエ真正ぐ
性ない吉「持て往ねへ位ゝ何で間の悪い

思ひとゝ二人りで取て貰ひお往りのうナ梅「真正
お持てのらーつて下さいますから其寫真お添て是も
お邪ゃるぐらお持なすつて下さいまーナ然ぐ笑ちやア
否で坐座いますヨと紙お包をーものを出せば吉太郎
い手お取り「ヤこりゃア毛ちゃア祐くら梅「ないト言つと
たかりで黙つて居る吉「お前の髪ざのト言ひるぐら
お梅の天窓を見て居る梅「厚面皮奴ざとお思ひお
さりつ為まひらと坐遠慮として居りまーさぐ自己

ふも吳るうと被仰ーさと僥倖思ひ切て出ーとの
で坐坐います併夫ハ吾倘の心と貴君お知らせ申
ーとい計りの為るーお目お掛さへ致せば棄る
すつと下さいましても最宜ーいので坐座いますト
氣の毒さうお顔赧らめて差伏むけば吉太郎ハ少
ー困ッつと風お「一寸見ると知れねへぐ中の方
と坊さのう梅「ないト夫ぢやア自己も髪の毛を切
て取交ッこお為様ざう後醍醐天皇御旗揚の時中

納言藤房卿が墮落の別嬪左衛門佐局へ別れを
惜を御自分の髪の毛を切り「黒かその乱れ世ま
でゐ〳〵へも是と今その形見とも見よと言ふ一首
の歌を添て贈られるとその別嬪が大愁歎で「書
置〳〵君が玉章身を添て後の世までの形見とや見
んと言ふ歌を残し川へ身を投て死んだと言ふとが
太平記に出て居るから辻占の悪いので髪の毛へ抓
えて居とのが「梅」夫でも藤房卿とやらが死だから
だが軍の門出で勝やら敗るやら知れるのに死と
へ餘まりな思ひ切り様吾儕やア貴君に目に掛る
までの貴君〳〵て置のだから毎日大事に守り
申〳〵居りますワ「嗚呼何にしても勤と言ふも
のへ儘に成らるい物だるア折から其處に有つて
味せんの糸が切てポッン

春雨文庫第五編巻之下終

深耆延房編集
浪華史略 一名難波戦記 五編近刻出版
葛飾為齋畫
花鳥山水漫画早引 初編一冊 二編近刻
彰義隊大野八郎遺稿
上野戦爭記 半紙本 全二冊
鮮齋永曜画
波多野英一先生著
小學用文填字法 全一冊
霞峯片桐先生書
山々亭有人著
赤穂義士烈婦銘々傳 全一冊
孟齋芳虎画
松村春輔編輯
近世櫻田記聞 半紙本 全七冊
月岡芳年画
彌左工門町十三番地
東京書肆 文永堂 武田傳右衛門

010190509511